

# 磚積擁壁と斜路の検討

## — 第一次大極殿院の復原研究 4 —

はじめに 第一次大極殿院の地形に関する研究は、1993年度の100分の1模型作成時から始まり、2001年度からは、第一次大極殿院地区の復原整備に向けて、回廊と磚積擁壁の形状を中心に検討されてきた。特に、磚積擁壁の東西に設けられた斜路と回廊内庭側の雨落溝の検出レベルを比較すると、雨落溝の傾斜が斜路と比較して強く、そのために両者で標高の逆転が生じるという問題が指摘され、2001年度の検討では、両者の標高差を解消するために亀腹状の緩斜面を復原する案が提示された（清水重敦他「平城宮第一次大極殿院回廊基壇の復原」『紀要2002』）。この検討では、1-3期（以下時期区分は『平城報告Ⅷ』2011に従う）の東面掘立柱塀SA3777を地形復原の根拠とし、磚積擁壁の上端は東西方向水平とすることを条件として、地形復原をおこなっている。

これらの検討の成果を参考とし、今回は、①磚積擁壁の高さの復原、②2001年度で提示された亀腹状緩斜面の具体的な形状の検証を目的として検討をおこなった。

**磚積擁壁の高さの復原** 大極殿前に設けられた磚積擁壁および斜路の擁壁は、最大で7段分が残存していることが発掘調査で確認されている。最下段の1段目は磚積擁壁前面の内庭部礫敷に埋まるため、磚積擁壁1段目上面

が内庭部礫敷の標高に等しく、その標高は70.55mである。いっぽう磚積擁壁の上面は大きく削平されており、当時の地表面の標高はわからない。したがって、斜路や内庭部の傾斜を検討する上で、まずは磚積擁壁の高さ（=壇上の地表面の標高）の復原が必要となる。

大極殿の建つ壇上では、大極殿SB7200の地覆掘付・抜取溝が確認されている。この遺構の検出状況と想定される基壇の規模と構造から、大極殿南面の旧地表面は73.0m付近と考えられる。ここから磚積擁壁まで、傾斜が一定であると仮定し、大極殿南側で検出されているⅡ期（奈良時代後半）の南北石組溝SD6608底面の傾斜角度を当てはめると、磚積擁壁上面の標高は72.557mと計算される。

ここで、磚積擁壁の高さを整数値で設計したと考えると、7尺（1尺=0.2954mで計算）で72.6178mとなる。また、磚積擁壁は5段分で標高が40.0～39.9cm上がることが発掘調査の記録から読み取れる。この数値を用いると、26段分（2.08m）積むと磚積擁壁上面の標高は72.63mとなり、前述の想定値72.557mや、整数値7尺と仮定した場合の数値72.6178mとほぼ等しい値となる。以上の結果を総合して、磚積擁壁は高さ7尺、上面標高72.62mとして、以後の検討をおこなうこととする<sup>1)</sup>。

なお、磚積擁壁の東西方向の傾斜は、1段目上面の標高から東西にわずかに傾斜していることがわかった（6

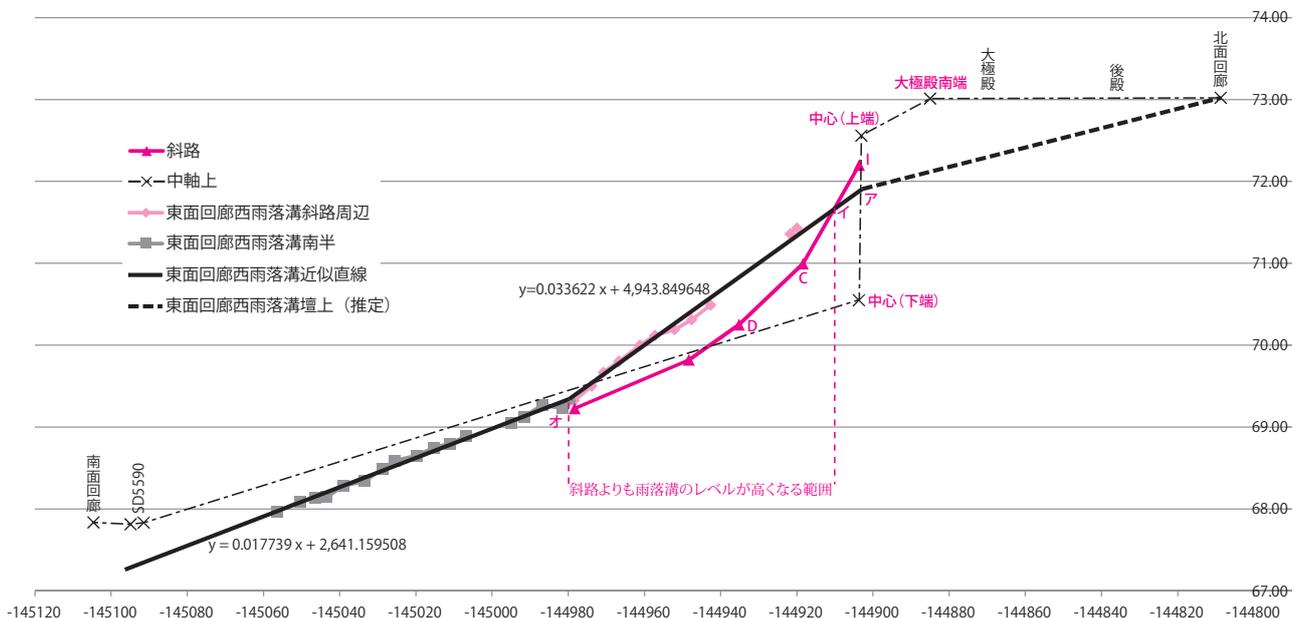


図85 第一次大極殿院各遺構の標高

表8 各点の検出高と推定高

位置	m	備考
中心	上端	72.62 段上の傾斜から計算
	下端	70.55 遺構検出高
A	上端	72.56 下端の傾斜と同じとして72.62から計算
	下端	70.48 遺構検出高
B	上端	71.70 △ACIの傾斜より計算
	下端	70.34 西側の勾配から計算
C	上端	70.99 残存礫敷面とDとの勾配から計算
	下端	70.34 CD間の礫上面の勾配から計算
D'	70.25	遺構検出高

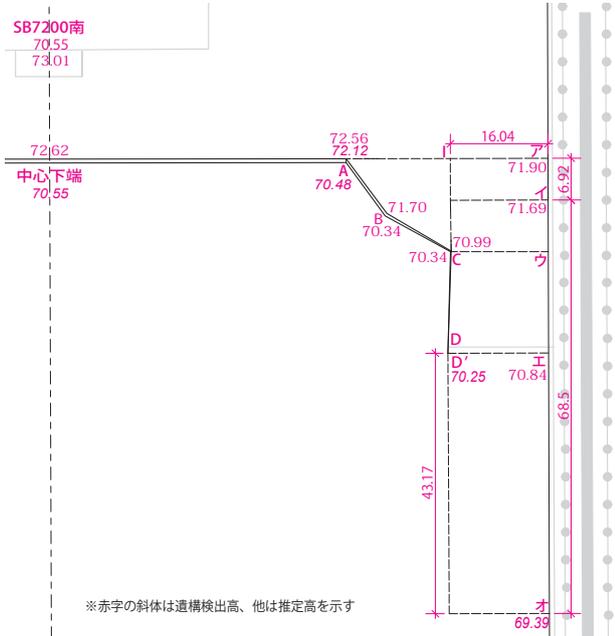


図86 磚積擁壁・斜路・東面回廊雨落溝各地点の標高

mm/m)。磚積擁壁上面の傾斜にもこの数値を当てはめると、磚積擁壁東端（屈曲点A）の標高は72.56mとなる。東面雨落溝の傾斜 次に、斜路および東面築地回廊西雨落溝との標高を調べ、両者の標高差を求めた（図85）。東面回廊西雨落溝の標高は、遺構が残存しない北部は不明だが、 $X = -144.980$ 付近で傾斜が変わる屈曲点（オ）があり、この点から磚積擁壁の手前（イ）までは雨落溝の標高が斜路よりも高くなる。この区間の段差の解消方法として、2001年度の検討では「亀腹状の礫敷傾斜面」が残存するとしているが、再度遺構の残存状況を確認したところ、後世の削平により形成された地形である可能性が高く、遺構としては残存していないと判断された。

そこで、磚積擁壁から東面回廊周辺の遺構検出標高と、そこから求められる推定標高を整理し、亀腹上の緩斜面を用いず、平面的に傾斜を処理したものとして検討した（表8、図86・87）。

検討に際して、以下の条件を前提とした。

- ①大極殿から磚積擁壁までの傾斜は一定とする。
- ②各点間の傾斜は一定とし、ある2点間に位置する点の標高は、各点からの距離との比率で求める。

この結果、傾斜の向きを見ると、斜路北部のI-C間の途中から南が谷状になり、斜路および斜路南端から

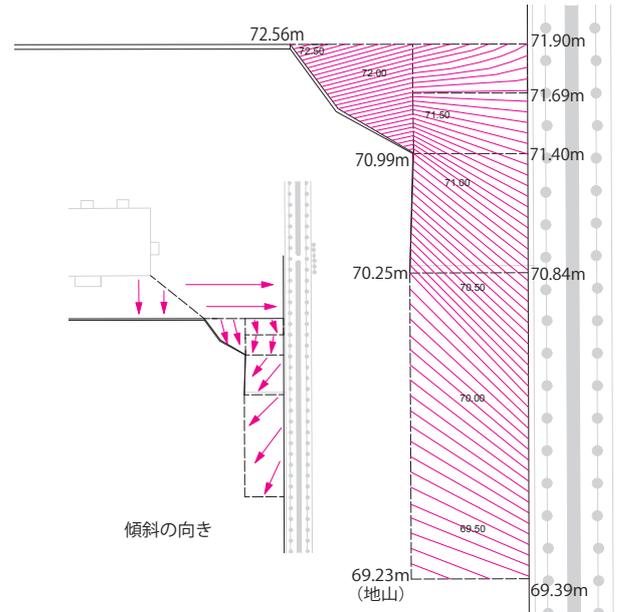


図87 斜路推定等高線図と傾斜模式図

43.17m南の地点まで、東から西へ低くなる傾斜が続くことがあきらかとなった。すなわち、斜路付近の回廊雨落溝は、回廊内部の排水を受けず、雨水などは内庭側へ流れていくこととなる。

ここで注意すべき点として、東西方向のみで考えると確かに標高の逆転があるが、実際にはその差は非常に小さいものであること（もっとも標高差のある地点で約58cm）、東西方向の傾斜よりも南北方向の傾斜のほうが強く、雨水などは概ね南へ向かって流れると予想されることがある。雨落溝の標高が屈曲する点（オ）より南は、中軸よりも雨落溝側のほうが標高が低くなるため、結果的には回廊雨落溝へと排水されることとなる。

磚積擁壁以北の地形 大極殿の建つ壇上の造営当初の遺構は残存状況が悪く、東西面回廊雨落溝も検出されていない。わずかに北面回廊南雨落溝と周辺の礫敷面確認されているが、その標高は大極殿周辺の推定高73.0m付近とほぼ同じであり、壇上はほぼ一定の水平面であったと考えられる。いっぽう東面回廊は磚積擁壁南の傾斜（ア-オ間）のまま北上すると、北面回廊雨落溝よりも約2.4mほど高くなってしまふ。そのため、再度傾斜が変化する屈曲点が存在することが想定できる。2001年度案では、I-3期の掘立柱塀の遺構を根拠として、もう一カ所の屈曲点を磚積擁壁の真東としている。この問題については、壇上の標高および回廊基壇高、さらには回廊に開く門の位置と規模の検討とあわせて検討する必要がある、次年度以降の課題としたい。（大林 潤）

註

- 1) 2002年度の検討では、模型を作製して擁壁高さを7尺に復原している。山本紀子他「平城宮第一次大極殿地形と回廊基壇の復原」『紀要 2003』。